

# 宿縁

一月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗  
本願寺派 **中原寺**

TEL 0477-372102  
FAX 0477-372102

## 手を合わせるのか 手が合わさるのか



新しい年を迎えました。

年ごとに世の中の変化は激しさを増し、様々な飛び交う情報に惑わされないよう、念仏の大地にしっかりと根差した生き方をしなければなりません。

ブツダ釈尊の言葉に、

『たとえ百歳の寿命を得るも、無上の教えに会うことなくば、この教えに会いし人の、一日の生にも及ばず』と。

人生百年の時代などといわれる今日、長くも短くも人生一度きりです。たとえ長寿を保つ

ても裏切ることはない無上の教え「師」に出会わなければ最後は衰えを嘆くばかりです。たとえ短命であっても無上の教えに出会うならば、その人は永遠のいのち「無量寿」をいただくのです。

無上の教え、すなわち「阿弥陀如来の救い」に出会ったものは自ずと手が合わさる生き方をいただきます。逆にそうでないものは手を合わせる生き方となります。手が合わさるといことは、如来さまによって自分のありように気づかされ、感謝に転換できる人です。手を合わせる人は、自分のありように気づかず、幸せを求めて願い事を何ものかに託する人です。

毎年お正月の初詣での風景がテレビに映し出されますが、あなたはどちらに所属されるでしょうか。

さて、「無上の教え」に会う、そこへ導く「師」に出会うという事はなかなか困難なことです。親鸞聖人は「ご和讃に、

『善知識にあうことも

おしうることもまた難し

よく聞くことも難ければ

信ずることもなお難し』

と述べられています。善知識とは仏法に導く尊い人ということ。そうした方に出会うのは大変難しいし、その教えをいただくこと、聞くこと、信ずることはさらに難しいことだと申されます。しかし無上の

教えは必ず人から人へ伝わっていくのです。私たちの先人には幾多の困難に遭遇しながらもそれを糧として真実なる人生道を歩み、人としてきらりと光る温もりを遺していた方々がいまいます。

林暁宇(ぎょうう)先生(大正一二年〜平成一九年)は北海道に生まれました。十七歳で結核を患い自宅療養をしていた頃、仏教誌「慈悲の国」により、赤貧の中、一生を病弱に生きた念仏者・赤禰(せきね)貞子さん(明治三四年〜昭和五二年)を知りました。幼い頃から病を抱えて、人から見たら大変な人生を歩まれてきた赤禰さんに願われ、大谷派の碩学暁烏敏師に師事し浄土真宗の僧侶となりました。しかし結核が再発して左肺上葉を切除。放浪、小豆島での四軒長屋の生活、そして北海道厚別駅裏のカンナ荘というアパートを「具足舎」として十七年間過ごされ真実信心の道を歩まれました。

二〇〇七年四月、八十四歳でお浄土にお還りになる一か月前のご法話での講題が「驚き・発見・出立」であったそうです。

年初の言葉としてこれを山門のところに掲示板に書きました。

林暁宇先生の『君は君の願いに生きていけ』の著書になかで『「出遇い」には、まず

「驚き」があります。今まで夢にも思ったことのないようなことに出遇った驚きです。そんなことはわかっていたとか、知っていたという

ことではなく、まったくの驚き。「驚き」と同時に「発見」。目がさめる。そして同時にそこから「出立」。出発。発心。「ああそう

か、これで分かった」で終わるなら出遇いとはいえない。新しい歩み、人生が、そこから

始まる』。すばらしい言葉ですね。

林暁宇先生は「この世に何の希望もない真暗闇の暗黒の中に生きていたと思っていたが、病弱の念仏者・赤禰貞子さんとの出遇いから、初めて自分にもわかる世界があるんだ」と知らされたと述べています。

そして林暁宇先生の善知識であった赤禰貞子さんは、「真実の出遇いというのは、真実の願いをこの自分にかけてくださる方(阿弥陀如来のわれに帰せよの本願)に出遇うということ。その願いには背けない。背く自分があればあるほど、そうであってはならないか、その人に願われているような自分になりたいという願いが深く湧いてくる。そしてその願いは自分で否定することができない。その願いに生きるしかなくなる。」と、身体から湧き出る念仏と願いを教えてくださいました。

ある時、この赤禰さんの隣人を訪れた某新興宗教の人が、赤禰さんにも入会を勧めると「私は南無阿弥陀仏で結構です。」と答えられ、「なんまんだぶつじゃその病気が治らんでしようが。」と言われると、「何を言うのです。病気は御利益です。」と下下に答えられたといひます。「この人にしてこの言あり」の感が致します。

手が合わさる人と手を合わせる人の違いがここに明白に表れています。

『わが愚かさを悲しむ人あり。この人すでに愚者にあらず。自らを知らずして、賢しと称するは愚中の愚なり』

(ブツダ釈尊の言葉)

真実に出遇うと自らの頭が下がります。

【寺灯雑記】

○門信徒会現役員の任期が満了

12/7

一期二年で任期満了となる門信徒会現役員の最後の会合が15名が出席して開かれました。

議題としては6/18日に実施された川越方面の一日バス参拝旅行の決算、10/19日に行われた第31回文化講演会の決算報告があり了承されました。また明年度(令和2年)の行事日程についてご任職から説明があり、その中で第32回文化講演会は10月17日(土)、講師には東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授の中島岳志氏に決まったことが報告されました。中島氏は45歳。専門は南アジア地域研究・日本思想史・及び政治学、歴史学で、テレビ等でコメントーターとしても活躍され、特に若者に人気があります。著書も多く「秋葉原事件」「親鸞と日本主義」は一読を勧めます。

会議後は慰労会があつて各人の任期中の労がねぎらわれました。ご苦勞様でした。

○壮年会・婦人会合同で年末懇親会

12/15

壮年会の本年最後の例会が本堂で開かれたあと、夕方五時半から場所を本八幡駅近くの居酒屋に移して婦人会の方々と同様で年末懇親会が催されました。

参加した35名の皆さんは六卓のテーブルを囲みながら互いに談笑。お酒が入るほどにたくさんの料理と語らいとでにぎやかな年末のひと時を過ごしました。

○お寺でクリスマスコンサート

12/24

昨年引き続き、当寺の門法会館にて何度も披露していただいた「ことりのえん」さんがクリスマスの歌をあつめたコンサートを開いてくださいました。

毎月「子育てサロン(パンダっ子)」に来られる方、ご近所の方、案内状を見て来てくださった方たち大勢がお見えになりました。そして「ことりのえん」さんが作って下さった手作り楽器で盛り上がりました。今回は初めて、歌、ピアノ、フルートではなく、ハンドベルの演奏があり感動のコンサートとなりました。主催の「ことりのえん」さんは、「大人も子どもも楽しめて、聴くだけでなく、気楽に歌ったり、誰もが参加できる演奏会を目指していきたいなと思っています」との感想でした。

(報告者 坊守)

○元旦修正会で新しい年明けとなる

1/1

大晦日夕方からの強い風も収まって、穏やかな新春は朝八時からの「元旦修正会」のおつとめで始まりました。

定刻に打ち鳴らされた行事鐘が響く中、住職が尊前の盃にお酒をそそがれ、およそ七十名の参詣者全員で高らかに正信偈を誦しました。

そして年頭法話では、ご任職から「成長と成熟」について、また前住さんからは「仏教は到達への道ではなく、驚き・発見・始まりなのである」とのお話を聞きました。そのあと、ご流盃をいただいて今年も聴聞

を心にかけて仏教徒としての歩みを共にすることを仏前に誓いました。

【大晦日の紅白歌合戦で感動した歌】

「いのちの歌」

歌手・作詞 竹内まりや

作曲 村松崇継

♪

生きてゆくことの意味

問いかけるそのたびに

胸をよぎる愛しい人々のあたたかさ

この星の片隅でめぐりあえた奇跡は

どんな宝石よりもたいせつな宝物

泣きたい日もある絶望に嘆く日も

そんな時そばにいて寄り添うあなたの影

二人で歌えば懐かしくよみがえる

ふるさとの夕焼けの優しいあのぬくもり

本当にだいじなものは隠れて見えない

ささやかすぎる日々の中に

かけがえない喜びがある

いつかは誰でもこの星にさよならをする時

が来るけれど 命は継がれてゆく

生まれてきたこと 育ててもらえたこと

出会ったこと 笑ったこと

そのすべてにありがとう

この命にありがとう

♪

(レコード売り上げナンバーワンです)

【法座・行事の案内】

○婦人会総会・新年会

\*一月十一日(土) 十一時

○常例法座

\*一月十九日(日) 一時

法話：高見沢孝之師(鎌倉市西教寺)

○教行信証を学ぶ(行巻)

\*一月二十五日(土) 二時

講師：前住

○壮年会総会・新年会

\*一月二十六日(日) 二時半

○婦人会法座

\*二月一日(土) 一時

正信偈の解説・仏教讃歌・ヨガ

※東京教区仏壯連盟四十周年記念大会

\*二月二日(日) 十二時半

講師：南荘撰師・南條了瑛師

会場：築地本願寺

参加希望者は1/24までにお寺へ

○壮年会法座

\*二月九日(日) 三時

○子育てサロン(パンダっ子)

\*二月十日(月) 十一時～十四時

【一月の掲示板のことば】

仏教は到達でなく

驚き、発見、出立ちです